泡沫の夢

クロセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
泡沫の夢

【Ｎコード】
Ｎ８３８８Ｍ

【作者名】
クロセ

【あらすじ】
ケロロ不在時に突然届いた脱走兵の知らせ。
反逆罪で追われるケロロ。
毎晩のように見る不可解な夢。
クルルの前に現れたケロロはどこか様子がおかしくて――――

始まり（前書き）

○基本クルル視点。
○妄想捏造話
オリケロ（オリジナルのケロン人）が出てきますので苦手な方はご注意下さい。

始まり

闇の中を歩いていた。
見ているだけで飲み込まれてしまいそうな、漆黒の闇。
そこには何もなく。ただ目の前には虚無が広がる。
視界が全て黒い液体で塗りつぶされてしまったようで。どこを見回しても光はなく、自分の姿だけが鮮明に見えるのが不思議だった。
強大な闇は見ているだけで不安を掻き立て、身の細る思いにさせる。

ふいに、視界の端に鮮やかな緑色を捉えて。見覚えのある背中に追いつこうと縺れる足を必死で動かし、手を伸ばす。遠ざかっていく背中に呼び掛けようと口を開き。声は届くことなく宙を彷迷って。

緑色は振り返ることなく真っ直ぐ歩を進めていく。距離はどんどん広がっていって。
追いつこうとすればするほど足は絡め取られたように自由がきかなくなっていった。
やがて闇に飲み込まれていく緑色を黙って見ていることしかできなくて。

背中に粘りつくような視線を感じた。
じわりと心に影を落とすように黒い闇が燻り初め。肌が粟立つ感覚と共に、襲い来る不快感。
無理矢理押さえこむように、小さく吐息をはいてから後ろを向く。

……あの男が、そこにいた。
息を切らせる自分の様子を馬鹿にするように口を歪め、楽しそうに見下ろしている。

なぜココに、あの男が。……

考える間もなかった。
疑問はやがて、声にならない悲鳴と共に消える。
唐突に目の前に広がる赤い血吹雪に目を見張り、遅れて焼け付くような痛みが体を襲い。腹に突き出たナイフを見て、ぼんやりと他人事のように認識して。

何だよ、こりゃぁ。

吐息とともに間の抜けた呟きが零れていく。

後ろに、先程まで自分が追いかけていたはずの緑色の男が、ナイフの柄を握りながら酷薄な表情を浮かべていた。
緑の口が歪む。
緑の男の嘲笑が、朦朧とした意識の中ではっきりと虹彩に焼き付き、耳朶の奥へ哄笑が響きわたり。
無情に突きされたたナイフが抜き取られ、為す術も無くだらりと体は地に崩れ落ち。

「　　」

漆黒の闇に絡め取られていくように沈んでいく意識の中。獰猛な笑みと共に緑色の手から振り下ろされる刃の煌めきが見えた。

第一話　予感

クルルは、訪問者を知らせる甲高い電子音で目を覚ました。
鮮明だった夢は急速に霧散し、やがて緊迫した世界が侵入してくる。
鼓動は早く、全身に汗が滲んでいた。頭は鉛のようで。重苦しい痛みを湛えている。

夢から離脱できたことにクルルは安堵の息を吐いた。
軋む心を押さえつけるように唇を噛み、小さな吐息とともに暗澹とした気分を吐き出す。

不快な夢だった。

殺される夢だ。不快意外のなにものでもない。
しかも、相手はケロロ。
彼に似つかわしくない嗜虐的な笑みを浮かべ、クルルの背後から何の躊躇いもなくナイフを突き立てた。
背中を突かれる生々しい感覚が体の奥でうずき、あるはずのない傷が痛みを訴える。

鮮血。血飛沫。鼻をつく鉄錆の匂い。

そして。

「　　」

呟くような微かな声を、クルルの耳はしっかり捉えた。
その言葉が意味するのは何か。わからない。
予知夢だ、と考えると背中に冷たい物が走る。

だが、夢とは元々、荒唐無稽。非論理的。絵空事。意味をなさない非現実的な空想の塊だ。
気にしないのが得策だろう。

不確かで、不安定な物を気にしてどうするのだ。
無理矢理そう思い込もうとする。

しかし、理屈でそう思っていても、もやもやしたこの気持ちは晴れなかった。
クルルの心の中で火種となって燻り続け、不安を煽っていく。
二度と思いだしたくも無いあの男が出てきたことも、不安を煽る一因か。

何故、今更。

もう会うことも無い男だ。
夢の中にまでまかり出てくる事もないだろうに。
小さくため息をつく。
ケロロが今、本部に呼び出されて基地には不在であった事も、クルルの心の水面にかすかな漣を立てた。
憂鬱な考えを振り払い、毛布を跳ね除けて起き上がる。

電子音はまだ続いていた。

ベッドから足を下ろし、コンソールへ向かう。
視線を監視モニタの方へ映すと、赤い男がラボの前で中々出てこない参謀に業を煮やしたように立っていた。
無造作にコンソールを操作し、扉のロックを解除する。

「入るぞ」

ギロロが憮然とした表情で入ってきたかと思うと、憂いを含んだ視線でクルルを一瞥し。腕に抱えていた書類を差し出した。

「本部から入電だ。どうやら地球(ボコペン)に脱走兵が逃げ込んだらしい。捕獲に協力せよとのことだ」

「脱走兵？」

眉根を寄せると、クルルはひったくるように差し出された書類を受け取る。

内容に目を通すと口元に皮肉げな笑みを浮かべた。

「クッ、捕獲しろっつーわりには、随分と親切な書類じゃねぇか。名前や素性が全くわからないどころか、顔写真すらついてねぇ。……こんなんでどうやって捕えろっつーんだよ」

小さな吐息とともに言葉を切り、顔を上げ、窺うような視線を向ける赤い男に書類を突き返す。

「……正体の知れない切れ者か、本部が情報を出し渋っているのか……。どっちだか知らねぇが、メンドクせぇ事になりそうだ」

そう言って不快そうに顔を顰めた。

書類には、既に地球に追っ手を放ってあり、ケロロ小隊はその人物とともに脱走兵の捕獲に協力せよと書いてあった。

ケロロ小隊には現在指揮官が不在だ。

恐らく、と赤い男は口を開く。

「このシドド少尉とやらが臨時指揮を取ることになるんだろう。ケロロはいつ帰ってくるかわからんからな」

能天気な笑顔を浮かべた、へっぽこな緑色の宇宙人の顔を思い出す。

ケロロは中途侵略状況を報告するために本部に帰還しており、しばらくは帰ってこられないはずだった。

（なんか、嫌な感じだぜぇ……）

胸騒ぎがした。
先程見た夢といい、ケロロが不在の時に舞い込んだ脱走兵の知らせ。
これは、偶然なのだろうか。
ついつい、そんな考えが頭をもたげる。
いつになく塞ぎ込んだ様子でなかなか顔を上げようとしないクルルにギロロが気遣うように視線を向けた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8388m/

泡沫の夢

2010年10月12日03時59分発行